

熟なる者が、法定の相續權を有し來らざるが如し。比島人が米人に向つて、何年後には獨立を許るすかと問ふは、無意義なり。問題は、相續者の年齢にあらず、其の精神的發育にあればなり。

或は言はん、比島には大學もあり、精神文明も臆がて米人と比肩し得べしと。或ば然らん、然れども日本の例にていはんか、維新の際、外國が敢て武力を以て吾を屈從し得ざりしは、吾に二千餘年來の特殊の文明ありしが爲めなり。即ち世界無比なる皇統の連綿と、文學美術の特殊的發達の歴史とを有せしに由るなり、更に大きく言はゞ、日本は東洋の安危を思ひ、東洋文明の擁

護を以て任じ、且つ任じ得る文け左様に、東洋文明の精華を吸収し、且つ發揮し來りしを以てなり。今ま夫れ、比島には皇統の連綿たるなく、又た文學美術の連續せる發達史あるなし、責めて今後は、東洋文明を吸収して、比島一流の新東洋的文化を醗酵し來らざる可らず。少くも、此の一事にして實現せられずんば、比島は永久に外國より尊重せらるゝ何物をも有せず、随つて獨立の資格もなく、又た内は以て民心を糾合すべき大義名分もなきに終はらん。アギナルド以上の如何なる大英雄が出現すとも、利害を以て糾合せる兵士を、義勇の士たらしむること難し、衆心離反は必然の數のみ、これ

其の糾合せるものは、烏合の衆にして、其の旗幟は、山賊の反旗と相去る幾何もなきを以てなり。比島民たるもの、世界の歴史に逆賊の名を留めざらんを要す、賊ならば、責めて義賊たれ。よし一時倒ほるゝとも、義賊は永久に義賊なり。假令へ勝つとも、賊軍は終に賊軍のみ。歴史上の批判は嚴正なり、貽むくべからず。

義賊と逆賊との岐かるゝ所は、一は大義名分ありて、一は之なきにあり。比島の大義名分は、民族としての大本を樹立する事にあり。比島人は東洋民族なり、島内各部族を糾合すべき一點は、即ち東洋主義ならざる可らず。是に於てか、比島民をして東洋文明を吸収せし

めん事は、今日の急務たり。蓋し文明宣傳的なる覺悟を以てせざれば、如何なる主義も擁立し難かるべく、獨逸すら、其の文明の宣傳を口實として、中歐の同盟を形成せんとしつゝあるに非ずや。これ、比島が東洋主義を實現せんが爲めに、先づ其の宣傳すべき或る文明を有せざる可らざる所以なり。

然るに、比島は今日まで、未だ東洋文明の仲間入りだも爲さざりし者なり。比島民は、天惠潤澤なるに馴れて、今日まで武陵桃源の夢を楽しみ居たりしなり。彼等は勤勉努力の習慣を身にする能はずして、否な其の必要なくして、終に天然資源を未開のままに放棄せり。

其れと同様に、彼等は其の精神界の開拓をも、必要なしとして今日まで打棄て居たりしなり。されば彼等の非文明は、其の本來の面目にあらず、畢竟その長き間の安逸の然らしめし所のみ。今や國家の永久に獨立するかせざるかの瀬戸際に立つ彼等は、即ち國民的の一大試験に際會せるものなり。彼等は奮發せざらんとするも能はざるべし。

二千五百年の歴史を有する日本すら、其の精神生活を豊富にし、其の文明を濃厚ならしめんが爲には、支那の文明によりて、誘掖開發せらるゝの必要ありき。今ま比島が東洋文明に入らんとするに當りては、日本が

支那に待ちし以上に、比島の日本に待つ必要あるや明らかなり。日本は既に東洋文明を吸収し終りて、西洋文明を同化し、新たに新東洋文明を建造しつゝあり。比島が日本を師とすることは、東洋の精神的文化と泰西の物質的的文化とを併せ學ぶの利益あり。近年、比島人の吾が國に遊學するもの、漸く多からんとするは、喜ぶ可きの前兆たるなり。今後、一步進んで、比島中に東洋主義の小中大學の勃興するあらば、比島獨立の旗を押し立つべき健兒は、必ず其中より出でん。百年の計を立てつるもの、教育を措て、他に求むべきの道なしと知れ。

(九) 亞細亞は亞細亞人の亞細亞なり

メレヂス・タウンセンドは、英國著名の亞細亞研究者なり。北清事變の起るや、一九〇一年、豫ねて公けにせし雜誌論文を蒐めて『亞細亞と歐羅巴』と題し、之を刊行したり、今その大要を摘むこと、左の如し(大日本文明協會『極東人の極東研究』中の和譯による)。

『今や歐洲は、歴史的なる世界統一的經綸を復活して、盛に尨大なる亞細亞大陸を侵掠し、之を征服せんとしつゝあり。思ふに、歐洲人の世界經略を畫するもの三回、初めに歴山大王の大雄圖あり、次に羅馬大帝國の大

東征あり、最後に十字軍の壯舉あり。何れも、敗亡に終り、其志を遂ぐる能はざりしもの五百年。斯くて時勢は第十七八世紀に進轉して、英國と露國とは、相竝んで南北より亞細亞大陸を席卷せんとするに至りたり。

『二國の侵略は、歐洲列強の爲めに其範を示し、各人は漸く其の狹隘なる歐洲の小地域より脱出して、人口、雲の如き亞細亞大陸に、企業の地を求め、此處に新なる市場を求めんとす、各國の膨脹主義即ち之れなり。論者は、此の商業的の遠征を試みんが爲には、國家の權力も亦之に伴隨せざる可らずと爲す。獨佛の二國は勿論、後進の合衆國に至るまで、蠶食の計を講じ來れり、是實

に第十九世紀の末頃より第二十世紀の初に至る世界の
大勢なり。若此の有様にして繼續せんか、亞細亞大
陸は、阿弗利加大陸の轍を履みて、列強の餌食となり、
その分割する所とならんは、鏡にかけて見るが如し、歐
洲列國にして、同志討を爲さざる限り、又その合衆國と
衝突するに至らざる限り、紀元二〇〇〇年に至らざ
るに、全亞細亞は歐人の掌裡に歸せんこと、必ずしも妄
想ならざるが如し。

『是れ果して事實として發現すべきか、余を以て之を
觀る時は、甚だ疑しきの極たらずんはあらず。夫れ亞細
亞は世界第一の大陸なり、其面積は正に佛國に四十一

倍。中には大山大河、大湖、大澤等、横はり、之れが往來は
非常の困難事なり。假に歐人にして、此の大陸を征服
せんとするも、全く之を軍事的に占領せんには、一軍團
十萬人より成れる大軍を、十箇所配置せざる能はず。
又夥多なる亞細亞の住民を思へ、獨逸學者の統計に據
るに、全亞細亞大陸には、軍人たり得べき八十萬の男子
を有し、其中五分の一は、現に武器を操づる事を知れり
といふ、之れ實に畏るべき勢力にあらずや。(中略)

『亞細亞人は又それ、特殊の知識の形式、思想の典
型を有し、代々之を傳襲して怪しむことなし、彼等には
其の特有の生活の方法あり、幾代となく人民は之を踏

襲して、而かも些の經濟上の缺陷を自覺することなし、思ふに、公平に觀察せんには、自然及び人爲の不便不幸の饒多なる、亞細亞大陸の如きは、曾に見ざる所なり、見よ其の大洪水、大旱魃、大内亂等を。此等のものにして、其一だに起りたらんには、豊饒の田畑も殷富の都會も、一朝にして荒上荒地と化せられぬべし、而かも堅忍不拔なる亞細亞人は、巧みに善後の方法を講じ、久しからずして不幸を恢復し、依然として満足なる生活を繼續するなり、亞細亞人の保守的にして、足るを知り、己れの命に安んじて、生を樂しむの美德を有するは、吾等歐洲人の及ぶ可からざる所なり。(中略)

『斯の如き歐亞二大陸の文明の相違は、吾人に教ふるに、歐人が二百年來頻りに蠶食せんとしつゝある亞細亞大陸が、決して阿弗利加大陸や、南亞米利加の如き、蠻人の地位にはあらずして、文化未だ爾かく開けざるも、此處には彫刻繪畫以外の一切の藝術あり、大法典あり、大文學あり、社會上の大怡樂あり、寧ろ歐洲の社會よりも、幸福なる一社會を出現しつゝある事を以てす。吾人は、歐人が、僭越にも斯かる偉大なる亞細亞を侵略して、吾物となさんとするの、甚だ危険なるを信ぜんと欲す。若し歐洲と亞細亞大陸とにして、全く混一調和するの機會あり得べしとせば、そは兩大陸の人民、互に相

接合して同化し、各特殊なる文化が、共に融然混和して、全く各自の特調を失ひたる時の外あるべからず、斯くては兩大陸の文化と異りたる、一新文化産出し得らるべしと雖も、斯くては、前日の兩文化は、最早や其の存在を告げざるなり、之を歐洲の先例に照すも、伊太利化したる英國人は、彼等が英國人たるの時よりも劣等となれり、歐人の亞細亞化するに至りては、英人の伊太利化したるものよりも、一層劣等なる者たらずんばあらず。亞細亞人を以て歐洲化するに至りても亦同じ、吾人は土耳其のバシヤに於て、之れが類型を見る。兩者等しく望むべきにあらざるなり。

〔畧〕假りに、歐洲人が太古の時代に與へし勢力なるもの有りとするも、开は忽にして消滅し、亞いで現出したるし亞細亞人は、其の特有の性質を表はして、有史時代に入れり、有史時代に至りては、吾人は亞細亞の絶えず歐洲を化したるを知りて、歐人の亞細亞を化したる事實の、最も乏しきを知らずんばあらず、歐羅巴なる名は、亞細亞人の歐に先だちて命名せし所のものに非らずや、數學及航海術の知識に於ても、亞細亞は歐洲の師なり、古代の亞細亞人の大膽は、到底、希臘人及び羅馬人の及ばざる所なりき、マケドニヤのアレクサンドル大王は、一時この大勢に相場を狂はせんとして遠く印度に

至りしかど、是亦一時の華々しき現象に過ぎざりき、歐洲文明は、其の信條と哲學とを外にしては、亞細亞の採用する所となりしもの無かりき。亞細亞の何處にか、歐化せる亞細亞人あらんや、猶太人の如き、希臘に位地最も近く、且つ最も永く接したりしに拘はらず、尙且つ希臘文明を、頑固に拒絶したりしにあらずや。

『亞いで起れる羅馬も、大帝國を建てたりしかど、其の勢力感化は、歐大陸に限局せられ、亞細亞の一部族だも、之が風化を蒙むるには至らざりき、今の亞細亞人は八億萬の衆を以て數ふべきが、其中少しにても羅馬の影響らしきもの、認めらるべきは、二十人を數ふべくも

あらず。是よりして白人の大移轉ありたるも、彼等は終に亞細亞大陸に一步を踏み込むこと能はずして止めり。斯かる間に、亞細亞人は猛然として奮起し、從來の猶太教、基督教、孔子教、佛教と異りて、回教出で、歐人を亞細亞以外に驅逐せり。是よりして、歐洲大陸が亞細亞人の征する所となるもの三回、即ち亞刺比亞のもの、其の一なり、土耳其侵入その二なり、蒙古人のもの、其三なり、何れも不成功に終り、近代史に入り、スラヴの勢力を初めに、白人は徐々に其歩を東方に進むるに至れり。漸くて、今や亞細亞大陸の二分の一は、歐洲人の勢力の下にあるもの、如く見ゆるも、是眞に表面のみ、其の實

相を發ばき來らんには、未だ曾て歐化の状を見ざるなり、露人の制をうくる北部亞細亞の地方を見よ、英人の下にある印度を見よ、皆な機會だにあらば敢然として獨立の旗を翻へさんとしつゝあるに非らずや。

〔中略〕歐洲人は得意氣に、日本の歐化せられしことを誇張するも、是れ實に愚なる僭上沙汰なり、事實は、日本は未だ曾て歐化せられず、日本の亞細亞的精神は、依然として更に轉移せず、彼は唯巧みに、歐洲文化の採用すべきものを選択し、之を日本化して使用せるのみ、是れ恰かも、土耳其が歐洲の文物を輸入したるも、依然として亞細亞的たるを失はざるが如し、日本を以て歐洲

の勢力感化の下に立てりと云ふは、支那茶を輸入せる英國が、支那の勢力の下にありと云ふと、論理同一轍なり。

〔中略〕兩大陸の思想發達の源に溯りて之を見るに、双方は明らかに二個の別系の文化の源泉たりしが如し、古來人類の信仰の基礎となり、思想の原型となりし形而上の信仰は、多くは亞細亞の創始する所にして、白人種は、科學に於て機軸を出し、物質的文明を促進せし諸發明を爲したれども、宗教に於ては、全然創始する所をかりき、希臘羅馬に行はれたる如き宗教は、以て人類の精神界を支配するに足らざるなり。是に由りて之

を觀るに、歐洲人は其根本の性に於て俗なりと云ふべし。現實的なり形而下的なり、科學的なりと云ふべし。彼等は唯物的に感覺に映ずる事物を思考するの術を知られども、思を形而上の思索に駛すること能はず。之に反し亞細亞人は、其根抵よりして宗教的なり、冥想的なり、哲學的なり、絶對的なり、彼等は常に何等か感覺を超越したる或る物を求めて、之れに渴仰隨喜せずんばあらざりき、是れ其の迷信的なりし所以なり。歐洲人は亞細亞人の如くに演繹的、獨斷的にあらずして、歸納的なり、彼等は常に結果によりて信條の眞否理否を批判し、結果にして僞ならんには、信條も亦僞にして採る

べからずと爲す。亞細亞人は神の作りたる法則は、假令そが吾人の怡樂を殺ぐとも、絶對に之に歸依せざる可らずと爲す、亞細亞人中の最も現實的なる支那人すらも、其皇帝には盲從せり、是れ、皇帝は天子なりとすればなり、彼等は又、人の氣及び土地の靈鬼を汚すの行を怒る。亞細亞人は一亘日曜日の安息を神の立て給ひし掟なりと信ずる時は、生死の際に逢ひながらも、尙且つ之に固着す。是れ、僧侶の處置に不服なれば、神の法律をも措いて顧みざる謀反好きの歐洲人の、全く知らざる所なり。

「尙ほ眼を轉じて、政治上社會上の有様を觀るに、亞細

亞人と歐人との間には、又著しき相違あり、歐人は自治の精神に富むも、亞細亞人は、自己以外の絶対意志によりて支配せらる、故に歐人に在りては、政府は人民の組織したる所のものにして、人民は總べて之に參與すべき者なり。されば、帝王の尊嚴と雖も、一同が立てたる法規を侵すを許さざるは當然なり。然るに、亞細亞人に在りては之に反し、帝王は天の命によりて此國を治めんが爲に降生したるものなれば、其權力は絶対なりと爲す。支那が如何ほど内亂を繰返すも、常に専制政體とされるは、支那人の思想の奥底に、此信念のあればなり。支那人の専制政治に屈服して、唯々諾々たるは、

患者が外科醫の手術に、黙々として服従するが如し、神に對しては、人類は卑下なるものにして、比較すべからず、神の地上の代表者たる帝王に對しては、如何なる軍令なりとも服せざるべからず、水火と雖も、拒むべきに非らずとし、此の境遇を己れの運命とし、否己れの幸福とし、人生の目的なりとして、之れに満足し、若し他より之を變更せんと企つるものにて、も有りたらんには、死力を以て舊慣舊制を防衛するが、亞細亞人の通性なり、彼等は、今日歐人の思想が、彼等の神聖にして寸毫だも侵すべからざる制度文物を、變更せんとするにあるを見て、猜疑の眼を放ちつゝあるは、之が爲なり。歐人は

彼等より見れば亂暴者なり、無法者なり。然るに斯かる思想は、歐人の間にも亦行はる、歐人は、其人神の外形的に異なるを以てか、將た其思想の全く異なるが故にか、兎に角に、亞細亞人は到底彼等と相融合すること能はざるものなりと爲す。否を其れ以上、彼等は亞細亞人と混ざるを以て、己れの恥辱なりと爲す。是に於てか、斯くの如き關係にて起り來るものは、歐人は亞細亞に於て其の統治者たるの地位を占むるか、然らずんば、亞細亞よりして、全く驅除せらるゝか、二者其一を出でず、危険なりと言はざるべけんや。

『或は言ふものあり、基督教は亞細亞に宣教せられざ

る可らず、歐亞の兩文明は、基督教を其橋梁として、联接せしめらる可きなりと。此言甚だ美なりと雖も、余は之に服すること能はざるものなり。何となれば、之を歴史に徴するに、基督教が敵國間を融和せし事實なく、假令へ基督教が一國に輸入せられたりとして、其地方の敵愾心は、依然として更に減少するの事實を認め得ざればなり。されど之よりも先づ、亞細亞人は、果して基督教を奉じ得べきやを究めん、一千七百有餘年の久しき、亞細亞の何處にか、一國として基督教を奉ぜるもの有らん、基督教は亞細亞の産なれども、歐洲に於て成育發達し來りたるものなり、謂はゞ歐洲精神の産物なり。さ

れば、古來既に立派なる數多の信仰を有したる亞細亞人は、基督教を見るに、己れの有するものより、劣等なるものを以てしたり。猶太人の如きは、既に基督教の故土にてあり乍ら、尙且つ之に化せられざりき。基督教の宣教師は、福音の下に世界を風靡せんとして、四方に旅立ちたれども、其の結果は、果して如何、亞細亞は依然として舊亞細亞人の亞細亞なり。其人民は、昔の如く異信者なり、彼等は基督教を忌むこと、猶太人と異らず。彼等は基督教を以て、彼等の好まざるの理想を抱くものなりとす、彼等の社會組織を破壊せんとする危険なる勢力なりとす。彼等は基督教の得意げに宣布せん

と擬する永遠の生命なる者を以て、却つて末恐ろしき脅威の辭なりとす、彼等は、己れの意識を滅却し、神と同化し、以て寂滅に歸せん事を以て、其信仰の目的となす、彼等が第一の信條は、汝の君たる汝の神を愛せよと云ふに在り、故に汝自身の如くに汝の隣人を愛せよと云ふが如き基督教の教義は、彼等に取りては甚しき重荷たり。勿論、吾人は亞細亞人が、全く他の宗教に改宗する者にあらずとは言はず。佛、回、二教は、其教義の儼然相違せるにも拘はらず、互に改信するの事實はあれども、獨り二教を奉ずるもの、基督教に改信せるものに至りては、吾人の曾て見ざる所なり。之れ一千七百年の

歴史が吾人に實證する所なり。若し將來、亞細亞人にして基督教に改信するもの有りとせんも、开は其人の自由意志を以て、自發的に爲せし事にして、決して歐人が外的壓力を以て、餘儀なくしたる者には非ざるなり。

「歐人以爲らく、若し歐人にして、一團體として結集し、共同一致して亞細亞に衝るを得んか、亞細亞を撃破する事、豈夫れ困難ならんやと。されど、余は之を信ぜず、假に一步を譲りて、論者の思想にして實行せられたらんとするも、亞細亞は決して屈服せらるゝ事無かるべきを確信するものなり。何となれば、乞ふ見よ、亞細亞大陸の尨大にして、其人口の夥多なる、歐洲の壓力の及

び得べくも非ざる所たるを。亞細亞人は、假令へ一時、斯くして歐洲の共同勢力に服する時あらんとも、それは印度の一時英人に服するが如けんのみ。之に報するは、力及ばずして一時隱忍するに過ぎざるのみ、機にして一度到來せんか、雲霞の如き群衆は、猛然蹶起して、外壓を排滅するに至らずんば已まざらん。されど、歐洲が全体その歩調を描へて亞細亞に對抗すること、果して可能なりや、亞細亞方が、進んで攻勢を取るとせば、今日に於ては、歐洲方が亞細亞方よりも強かるべきは、勿論なり。白人は、團結力に富むのみならず、又科學に於て長けたり、されば、如何に亞細亞の全體が同盟して歐洲

征伐に従事したらんとも、歐洲方にして力を協せて之を防がば、亞細亞方は、ダーダネルスの海峡をすら越え得べくも思はれずと雖も、歐人にして亞細亞を攻撃する場合にも、亦同様に必ずしも成算ありとす可からず。即ち、歐人の亞細亞遠征の兵として派出し得べきは、一百万を越ゆる能はず、之を行軍せしめて兵站に落度をなきを得しめ、而かも土地の形勢險悪なる亞細亞大陸を横斷せんことは、容易の業にあらず、之が爲めの勢力も、資本も、決して尠少なからざるなり。又見よ、亞細亞には男兒の數、五億あるに非ずや、其多數は、沙漠の遊牧民にして、若し之に現代の戰術を吹き込まんか、以て恐るべ

き勢力となるに至らん。又思へ、今日の列強中、何者か日本の勢力を容易に破碎し得べきぞ、日本人にして、若し他の亞細亞人に其武術を教授するに及ばんか、實に危険の至りならずや。假りに數歩を譲りて、歐洲が此の未曾有の大戦争の勝利を博し得たりとするも、歐洲は果して、其勝利を一時的ならしめざるの算あるか、八億の民衆の、失繼ぎ早なる叛亂は、歐人をして應接に遑なからしめ、奔走に疲れしむるに至らん。歐洲は結局、手を引き去るの外はあらざるべし。余を以てすれば、是れ歐洲の亞細亞侵略の最後の結果たり、而かも歐洲が斯の如き明瞭なる結果を得んが爲めに努力するは、唯そ

の商業を擴張せんが爲に外ならず、愚も亦甚しといふべし。余は歐人の多數者が斯かる目的の爲に飽くまでも其無用の重税に甘んずるの理由を解する能はず、英人の印度に就いて見るも、印度人の腦裡、未だ曾て、彼は吾が領士の侵掠者なりといふ念慮去らず。英人の驅逐は唯だ時間の問題なり。

『故に余は、此の頽敗せる亞細亞の前途は、之を歐人に任せずして、神意に打任かすべきを主張するものなり、神は、既に過去十數年の久しきに亙りて、此大陸が正教を信せずして、己れの欲する處を行ふの自由を許るし給へり。將來も此の自由を許るさゝらんや。余の推

知する所によれば、亞細亞の大國支那に於ては、冥々裡に革命の氣運熟せるものゝ如し、かの現政府に反對し、西歐の文明に反抗して、西域地方に頻起する反亂は、是れ革新の氣、民間に動くを示すものなり。亞細亞にして眞に革命せんか、此の廣大にして人口多き陸土は、近世式の軍隊武器を作りて、成吉思汗時代の英氣を振起し、翕然として歐州の勢力に抵抗し來るべし。されど亞細亞人が斯の如くに、眞に西洋の文物を採用するに至るべきやは、余の甚だ疑ふ所なり。何となれば、亞細亞は、全然歐洲の文化の系統以外に立つ者にして、之に隸屬せず、其れ自身の特質を以て、獨立する者なればなり。

若し夫れ、今後百年又は數百年にして、余の豫言全く相違し、歐洲が亞細亞を征服して、之を己れのものとして爲し、世界は歐洲文明の獨占する所となるに至るとせば、余は余の五十年の研究に係る東西の史籍を、悉く燒棄するの外なし。」

人若し印度の現情を以て、東亞の終に歐洲に對して雌伏するの外なきを例證するものとせば、請ふ印度の志士の現に語る所を聽け。志士、其名をエム・バラカット・ウーラといふ。曩に吾が東京なる外國語學校の印度語教師たり、今は其首に賞を懸けられて、搜索せられつゝある亡命の人なり、其言に曰、「人若し印度民族の爾く

多數なるを想ひ、同時に、英國の印度に於ける、眞に懸軍萬里なる想は、英國の印度征服を以て、洵に不可能事とせざるを得ざるべし。然り、若し英國にして、單に武器を以て印度を征服せんとすれば、是れ全く不可能事のみ、されど、正直にして且つ單純なる民族は、極めて容易に、怜悯なる國家によりて欺瞞せられんのみ」と。

印度が今日まで起つことを得ざるは、英國の巧妙なる政策によるのみ、斷じて印度の志氣の衰へたるに由るにあらず。過般來朝せし印度の詩人タゴール翁の最近の意見として傳へらるゝ所のものに曰、「日本は著しき進歩を遂げたり、若し印度にも同様の機會さへ

與へられしならば、印度も亦同様の進歩を爲すべきのみ、吾等は智力の點に於て、日本人に劣るものに非らず。恐らくは、技術に於ては日本人に及ばざるべきも、純乎たる思索に於ては、日本人の上に在り、彼等は自由に自から教育することを得、又た智識を求むるが爲に、世界中の大學に、その青年を送ることを得しなり。然るに英國人は、吾等を弱者たらしめ、吾等の教育を阻止するを以て得策とし來れり、之れ總ての印度人が爾かく感じ、且つ總ての眞實なる印度研究者の承認する所なり。英國人は、吾等が實驗に於て科學を學び、研究を進むることを好まず、英人は、吾等の經濟的發展を阻止する爲

めに、不斷に苦心し來れり。吾等は自から教育し、自から發展せんと試むることを望み得ざる状態に在り、英國の統治は、斯の如き努力の、畢竟無益に歸するやうに組織せるものなり』云々。これ實に大正五年八月十二日紐育發行のワイド・ワールド紙上に出でし翁の意見たるなり。亞細亞は終に亞細亞人の亞細亞なり、其の一時雌伏するが如きは、偶ま以て、將來の雄飛を豫兆するものと見て可なり。

(一〇) 諸外國植民政策の內的發展

世界の最初の植民的勢力は、先づ亞細亞よりして歐

洲方面に向つて進みたり。上古の諸國民中、フォニシヤ人の活動の如きは、其著明なる者なり。上古國民中、希臘人の植民的活動は、歐洲より亞細亞に向つて植民的勢力の動き初めし第一歩なりとすべし。希臘人については羅馬人あり、前後殆んど一千年間、歐洲方面より亞細亞、阿弗利加の各方面に亙りて、植民地を擴ろげたり。中世紀の植民事業は、日耳曼人の羅馬帝國突撃に始れり。中世紀に於ける亞拉比亞人の前進は、亦た東洋人の活躍を例證する者とす。彼等は即ち東洋より起りて、西は地中海に沿ひ、西班牙に至り、南は阿弗利加、東は印度より、極東(支那及び日本)の沿岸に達し、阿弗利加

の東岸(今日獨領阿弗利加)にも、特に植民地を設けたり。亞拉比亞人の植民事業は、其期間に於ても、地域に於ても、前古未曾有のものなり。後世葡萄牙人其他が、廣く商業通路を開きしは、畢竟この亞拉比亞人の踏みならせし路を辿どりしに過ぎず。

然れども、葡萄牙人、西班牙人等の活躍せし時代は、既に世界の植民的企業時代の入りし時なりしを以て、各國は相前後して、競争的に領土の新發見に従事し、從來未だ開かれざりし航路も發見せられ、未見の土地も見出されたり。亞米利加の發見、印度への海路の發見、太平洋への前進、南洋に於ける新大陸の發見、阿弗利加内

部の開發等の、相踵いで事實となつて表はれしは、此の時代なりき。

葡萄牙人、西班牙に次いで、此の時代の立役者となりしは、英吉利人、和蘭人、佛蘭西人等にして、獨逸が後れ走せに之れに加はりしは、十九世紀末葉の事に過ぎず。

獨逸は、當初より積極的植民政策を避けたり。此點に於て、其植民史は、之を精査して、吾國の參考と爲すの値あり。ビスマルク公の意見にては、政府自ら海外企業を起すよりも、直接間接利害關係を有する經濟社會に之を一任するを以て、當時の植民政策としては、當を得たるものと爲せしが如し、即ち其一八八四年六月の帝

國議會に於ける施政方針演説に曰、

『植民地の成立に關する責任は、之を吾が航海及貿易業者の活動と企業的精神とに一任し、成る可く海外の領土を直接に獨逸帝國に合併するの形式を採らずして、かの英國の商人組合が東印度會社創立の場合に於て示したるが如く、其成績顯著なるものに對して、英國の王室特許狀同様の特許狀を附與し、植民地の統治は、主としてその利害關係者に委任し、帝國は、唯だ之れに、歐洲人に對する歐洲人の裁判權と、常備兵を置かずして行ひ得べき保護とをのみ、與へんとす。』

阿弗利加最大の保護地、即ち獨領東阿弗利加、並びに南洋最大の保護地、即ちニュー・ギニヤの獨逸植民地の如きは、徹頭徹尾、まづビスマルク公の、此の植民政綱に従つて、之を行ひたり、一例として、茲に、ニュー・ギニヤ會社に下附されし保護狀の文言を示さん。

『朕は此の保護狀を以て、右會社に國家的制度を設け、且つ之を維持するの義務、並に十分の司法費を負擔するの義務を負はしむると同時に、相當の領土權、並に保護地内の

領主地を占有し、處分し、又た土地に關する權利に關して、土人と契約を締結する專有的權利を附與す。朕の政府は此等一切の行爲を監督し、既得の所有權を尊重し、土人を保護するが爲め必要な規定を發布すべし、朕の政府は、司法制度を定むる權、並に保護地と外國政府との關係を規定し、處理するの權を保留す。朕は茲に、此の保護狀に依り、朕の官吏が、會社及び其の役員の保護と援助とを得て、朕の此の保護狀中に於ける一切の法律事項を實施すべきことを約束し、且、命令す。」

然るに、獨逸帝國は一八九〇年に至り、獨領東阿弗利加會社と、別に契約を締結し、保護狀を以て會社に委任せる權利の行使を、回收せしを手始めとし、其後一八九六年には、ニュー・ギニアより領土最高權を回收せり。蓋し新領土の發展に伴ひ、會社制度にては、責任多き公法上の義務を負擔するに堪へざるに至りしを以てなり。

特許會社制度は、葡萄牙も、阿弗利加及びブラジル等に之を試みしが、幾くもなくして、その獨占權の回收と、國家自身の行政擔任とを必要するに至れり。英吉利佛蘭西及和蘭の如きは、比較的久しく、特許會社の制度を持續したり。佛國の如きは、貴族を大植民地に封じたるの外、十七八世紀中、多數の植民會社の組織を許可せり。

英領東印度會社の如きは、二世紀間に亙りて、英國の印度統治權を擴張したり。其の瓦解せしは、當時の政治上及び經濟上の關係の變更せしに由るのみ。此の東印度會社より、統治權を回收せし英國は、其後(即ち十

九世紀の末葉に至り、再び特許會社制度を試みたり、即ち一八八一年、北ボルネオ會社に、特許狀を與へし如き之れなり。同會社は、今日なほ會社設備の聯隊を維持せり。越えて一八八九年、英國は、英領南阿弗利加會社（即ち通稱「特許會社」）に、特許を與へたり。同會社は、未だ配當を爲せしことなきも、現に大なる信用を博せり。蓋し、大膽にして天才ある創立者セシル・ローツの卓越せる人格が、商業社會の輿望を得し結果たらずんばあらず。此の會社は、從來その獨立を維持し、最近、南阿弗利加に於ける英領植民地が、皆を聯合して、南阿弗利加聯邦を組織したる際にも、會社の領域は、依然聯邦外に

超然たりき。

然れども、私設會社に、永く廣大なる領土の政治を委託するは、近世法律の發展、及び法律の精神と背馳するものなり。チンメルマン氏の如きは、特に最近この會社制度を抗撃せり。蓋し「國際交通の原則によれば、今日一定の國家に屬する私設會社の植民政策的行爲に就いては、其國家自から、外部に對して責任を負はざる可らず。是を以て、私設植民なるものある事なし。戰爭の場合に、國家が軍隊を派遣し、又は外交上の手段によりて、私設植民會社を援助せる幾多の實例あるは、蓋之れが爲めなり。國內法上より觀るも、近世の法律的意

識によれば、植民地にても、亦た本國同様に、唯だ國家のみ各種の人民に高權を行使するの權力を有するものなりと、云はざる可らず。斯の如く國際法上、及び國內法上の、兩點より觀るも、特許植民企業の制度は、土人並に本國移民に對して、共に禍の基なり。』

又た會社の側よりいふも、特許取消が、却つて繁榮の基となる事あり。英國のナイジェリ會社（一八八六年ナイジェル保護國全部に對し特許狀を得たる）の如き、獨逸植民會社（獨領東阿弗利加會社）、ニューギニア會社の如きも、公法上の職務を拋棄せる後、却て頗る満足すべき内部の發展を睹たり。

然れども、方今最も國家主義的なる獨逸と雖も、其の保護地中には、なほ會社の形式を有する多數の資本家的企業あり。此種の私人的企業が、植民經濟政策上、大に重要な意義を有する事は、何人にも疑なき所なるべし、吾人は、植民高權の行使を、私立會社に一任する事の、時代後れなるを知ると共に、國家が陰に陽に、私人の會社を補佐して、其の植民地に於ける經濟戰爭に勝利を博せしめんとする傾向の、漸く著明なるを認めずんばあらず。

資本家の植民會社に、植民地の統治高權を委託する事を不適當なりとする議論と、海外の經濟的企業は、國

家宜しく植民會社に一任すべしといふ議論とは、互に矛盾するものに非らず。私立會社は、植民地に於ける公法上の權限を拋棄して後、純然たる經濟的事業に成功するを例とすればなり。

往時に於ては、植民地に於ける株式會社すらも、本國の監督をうけしものなるが、最近に至りて、植民官廳も、國家の監督を公益の保護に止め、經濟上の發達は、徹頭徹尾、これを其の關係會社機關の責任に委ぬる事となれり。斯くて本國は、一方植民地内に企業の起るを容易にするべく、十分の保護と獎勵とを與ふると共に、一方最廣義の通商及び交通の發達を、植民地に向つて獎

勵するに至れり。こは、近世植民史上の一大變調たるなり。其の實、近世植民史の始まりし以來數百年間は、所謂重商主義なるもの各國に流行し、植民地を、成るべく本國の爲めに利用せんとし、植民地は枯渴するも、本國さへ富まば足れりと爲し、國家自から通商上の獨占權を掌握するか、又は一定の營利會社に之を特許し、以て内外國人の競争を杜絶し、植民地を獨占し、其の天産物の獲得し得らるゝ限りを、獲得せんと努めたり。此結果として、植民地自身は、天然資源の發達と、人民の繁榮との上に、悪しき影響をうけ、引いては、本國までも、其損失を蒙むるに至れり。

斯かる間に、國民經濟上の學說、及び實際は一變せり、是より先き、英國はコブデンの首唱にかゝる『自由貿易、及び平和、並に國民間の好意』といふモットーの、十九世紀の後半に至つて、其の豫想に反することを經驗したり。當時各國に於ける國民的精神の發揚の如き、正に其一原因なりしなり。抑も自由貿易の主義たる、各國の主要生産品を交易し、有無相通じ、彼此相助くるに在り。是を以て、世界には政治地理の必要なく、唯だ商業地理あれば足る、兵は凶器、政府亦無用のみ、英國の自由貿易は、必ず諸列國をして、之に模倣するの已むなきに至らしめん。斯くて、世界各國の生産高は増加し、戦争

は息み、十九世紀の末までには、萬民鼓腹の天下を實現し得べしと、いふに在りき。然るに、十九世紀下半期の國民的統一、及び國民的精神發揚の現象は、此のユートピアに對し、意外なる結果を將來せり。三十年戦争時代に、地理的の名稱に過ぎざりしドイツランドが、十九世紀下半期に至り、政治上の一新勢力となりしを始めとし、伊太利の統一あり、次いで北米合衆國の建國事業ありし以來、世は自由貿易主義者の重視する個人々々の自由競争よりも、國家を單位とする一大競争を重視し、個人と個人、會社と會社との間に於ける商業競争は一變して、國家と國家との商業競争

となり、國家自から一個のトラストの觀を呈するに至り、算盤及び平和と聯想せられし商賣は、今や軍艦と戰爭とを聯想せしむるに至れり。

植民學者は、近世の戰爭の、一として植民の事に關係を有せざるなきを言ふ、之れまた國民的膨脹の、重商主義を破壊せし事を證する者とす。試みに一八七〇年の普佛戰爭を見よ、平和主義の學者は、之を以て避け得可かりし戰爭と爲すと雖も、天下の勢は理窟通りには行かず、僅に人口百五十萬、面積一千方哩のアルサス・ローレン二州は、普佛兩國の間に、終に中原の鹿となりぬ。普國が勝利の結果として佛國より得し償金は、僅に五

十億法に過ぎず、普國豈に此の少許の償金と、猫額の地とのみを目的として、戦端を啓きしものならんや。其の戦ふや、蓋また已むを得ざるに出るのみ。已むを得ざるとは何ぞや、國民膨脹の勢に驅られしの謂のみ。普國の國家統一事業に次いで、國民膨脹の時機到來せしこと、猶ほ吾が日清日露二大戦役後、最近に日本民族大膨脹の機運の、到來せしが如きものありしなり。蓋統一されし國民は、膨脹せざる可からず、膨脹する國民は、他と衝突せざるを得ず、衝突は勢なり、一人のよく防ぐ所にあらず。

斯くて、英國の樹てし自由貿易主義と、其の結論たる

商業的平和主義とは、英國の豫想せし如く世界各國の模倣する所とならず、佛國始め保護貿易主義を實施せしのみならず、英の植民地すら、母國よりの輸入品に關稅を課するに至れり（濠洲のウィクトリヤの如し）英國丈けは、流石に最近まで自由貿易主義を固守すれども、之れ別に理由あり。從來世界の船舶の大部分は、英國旗を掲げし船なりしが故に、其輸入貨物の運賃も、保險料も、悉く英國のものとなりし而已ならず、英國の資本の、外國に放下せられしもの多かりしを以て、自由に輸入せらるゝ物品は、生産利息と共に、英國に輸入せられしわけなり、之れ英國が、自由貿易主義を固守するも、別

に苦痛を感ぜざりし所以なり。然るに其後、世界各國の海運業は悉く發達し、外國に放下する資本も、亦各國とも相應に増加し來りしかば、米國の如きは英國より米國に放下せし質本を拂戻さんとし、英國人の株券を買戻しつゝあり、流石の英國も、自由貿易一天張りにては、立行かざるに至り、近時保護關稅運動の再興あり、植民商業政策に、根本的の改革を加へ、本國と植民地との間に、關稅同監を締結し、又は少くとも、關稅特惠の制度を、一層鞏固と爲すに努力しつゝあり、（加奈陀、ニュー・ジールランド、英領南阿弗利加の自治植民地等と、英本國との間には、既に特惠關稅の約束あり）獨逸の如きは、今回

日本の占領せし南洋の小島を除き、其他の保護地に對し、總べて適度の輸入税を課しつゝありき。こは保護關税に非ずして、寧ろ純然たる財政關税なり。

前きに廣義に於ける交通が、植民政策上の一新傾向なることを一言せしが、輒近獨逸其他の遣り口を見れば、最もよく、此の傾向を窺知し得べきなり、即ち植民地と海外との聯絡、並に植民地内に於ける水陸兩路の開設等、凡べて技術的なる交通を始めとし、貨幣制度の組織、並に近代式銀行制度の實施等、凡べて現代文明國民の必要を感ずる一般の經濟的交通に至るまで、科學的精確を以て、着々實施せられつゝあり、

要するに、近代諸國の一般植民政策は、漸次内面的に發展し、改善せられつゝあり、斯くて、最初の形式、即ち國家が廣大なる植民地を私人の大企業に一任し、一切の權利義務を課したるもの、現今漸く廢たれて、國家自から海外所領の開發に旺盛する事となり、蠻域の資源を枯渴して、本國をのみ富ますの方針を取らず、自他共に福利を享けんことに努力するに至れり。然り而して此の自他共榮の方針は、獨り本國と植民地との間に於てのみ認めらるゝ新傾向にあらず、植民地の最廣義に於ける交通發達を目的とする、機會均等門戶開放主義は、漸次各國間に其必要を認められ、植民地獨立は過去

の夢と化し鎖國主義利益壟斷主義は、漸く其の實行の不可能なることを證據立てつゝあり。若し四海同胞主義が、今後實現せらるべしとせば、開は先づ植民地に於てせらるべきや明かなり。かの人種の黄白を論じ、偏狹なる帝國主義に拘泥するの輩は共に今後の植民政策を談ずるに足らざるなり。

(一) 東西のモンロー主義

(一) 米國のモンロー主義

モンロー主義は米國の產物なり。蓋米國は、日本が過去に於て四面環海の故を以て、久しく對外政策の必

要なかりしと一般、米國の、東西兩岸を洗ふ太平洋の爲めに、殆んど全く他國と孤立し、最近までは歐洲諸國の所謂『對外政策』なるもの、必要を見ざりしなり。歐洲諸國は、山川による自然的國境よりも、寧ろ人爲的なる國境によりて分かつる者多し。是を以て、對外政策は立國の本義中に於て、最重大なる要素と認めらる。米國は即ち之に反す。加之、米國には王朝なるもの無く、随つて其の策は、直接人民の經濟と關係あるものに限る。經濟以外に、別に國策を講ずるの必要を認めざりしなり。故に最初の大統領華盛頓は、其の別辭フニキョーヴェルアフレスに於て、濫りに國民の『盟訂連衡に加はる』べからざること

警告せり。然るに今や米國は、此の舊時の孤立情態を維持する能はず、國利民福の、一に國內にて解決せられし如き時代は、既に經過したるを以て、此の主義の將來維持し難きや、明白となれり。

然るに他の一方に於て、米國人民一般、及び其の先覺者等の隨喜渴仰する一教説あり。從來幾たびの歐洲諸國の嫌惡する所となりしもの之なり。之をモンロ主義といふ。

那翁ウオータールに於て一敗地にまみるゝや、歐洲諸國には一の反動起りぬ、米國の爲政者の大に恐怖せしもの之れなり。之より先き、露西亞、普魯西、奧太利、

佛蘭西及び西班牙の間に『神聖同盟』なるもの起れり、第十八世紀後半に於いて歐洲に發生せし民政思想を根絶せん事を目的とするもの之れなり。當時漸く國を成したるばかりの米國が、自己の共和政と反對せる此同盟を恐れしも、亦た當然なり。況や該同盟は、西班牙より奪ひし米國革命軍の治權を西班牙に回復し、佛國より奪ひし北部の大領地を佛國に復へし、米國をして此の上に膨脹することを許るさゝらんとする如き事を以て、目的とするに於てをや。時しも南米の西班牙領地は、西班牙の威勢の傾きしに乘じ、反旗を翻へして獨立せり。最近に英國より獨立せし北米は、之を見て

同情なき能はず、同じく民政主義を基礎とせる同一型の新國として之を歓迎せり。

是に於て、米國は民政主義の理想を追求して、歐洲の舊邦に對し、歐洲が那翁に對する反動と、絶對政權の渴仰とに傾きし間に、米國は其の新たなる理想を擁護すべく、モンロー主義を唱導するに至れり。されば大統領モンローの主義は、一國人民にとりては、新理想の別名として其心魂に響き、此の語を聞けば、懦夫も起ち、匹夫も勇さむ有様なりき。

斯くて十九世紀前半に達しき。其頃、西班牙の太平洋沿岸全部に對する要求、米國に對するフロリダ割讓

拒絶あり、英國の米國西北部に對する要求あり、同地方に於ける露國の勢力の侮り難きあり、ラテン・アメリカ諸洲に對し、全歐洲諸國の蠶食を試みしあり、終に佛國の窃かに墨其古王として、奧國王家より新王を送らしめんと企てし事あり。斯かる出來事の矢繼ぎ早やに起るを見ては、幼少なる米國は自己の共和政の爲めに深憂なき能はず。歐洲諸國が再び、阿弗利加に對して行ひし所を、米國の新世界に對しても行ふことは有らざるかとの抱憂は、片時と雖も米人の腦裏を去ることなかりしなり。

米國の如き幼少國は、モンロー主義なくしては、一日

も存立し得ざりしなり。素より米國としては、別に領土擴張の必要もなかりしならん。又例へばミッソリー河を界としたる狹まき領域内に於ても、米人は其の理想國を經營し得たりしならん、然れども、米大陸の他の部分が、或は「勢力範圍内」なりとか、或は「勢力平均」上必要なりとか言ひては、常に虎視眈々たる歐洲諸國の窺ふ所とならんは、米國の自衛上看過し難き所なりしなり。斯くては米國も、其の境界に於て、諸列強と衝突の憂あるにより、絶えず大軍を備へざるを得ず。且つ歐揚の下、他人の鼾睡を見んこと、甚だ以て目ざはりなり、何時面倒なる國際問題の持ち上がらんも計かり難け

ればなり。これ米國が、強國となりし後も、又た歐洲の侵入の恐れなき今日に於ても、モンロー主義を其國民に鼓吹する所以たるなり。

後年に至り、モンロー主義の要求は、要するに歐洲の諸國をして、南北兩大陸を「自己スライヤー、オブ、インフレーションの勢力範圍」として認めしめ、此の範圍内に於ては、外國は如何なる土地と雖も屬領地とする能はず、又た武力を以ての侵入を企つる能はざる事を認めしめんとするに在りき。然るに此の主義は、英國が最近に是認せし以外、自餘の諸國によりては、未一回も是認せられざりき、斯くては戰亂の端も啓かれし筈なるべきも、今日まで幸に其事なくし

て過ぎしは、列國特に英獨の間に、相互の嫉視ありて、互に制尅し合ひしに因るなり。

(二) 東洋のモンロー主義

歐洲文明を以て論せば、米國も日本も未だ幼稚なる國柄なり。之に反し、歐洲諸國は何れも舊邦にして、其文物は程度の差こそあれ、米日兩國に移植せられしものなり、されば、此等兩國は相互の間に共通の問題少なからず、蓋し日米兩國は、各々地球上に於ける經濟的及び軍事的の一大勢力にして、而かも各々歐洲列強の嫉視する所なればなり。且夫れ、支那の日本に於けるは、猶ほラテン・アメリカの合衆國に於けるが如し。一方

には動かすべからざる勢力に對するの敬意ありと雖も、同時に他方に放て種族と習慣傳説との根本的相違に原因する嫌惡侮蔑の念あり。

今夫れ、モンロー主義は没我的政策にあらず、素より利他的精神を以て取扱はれしことは事實なるも、本と之れ唇亡びて齒寒きを虞るゝに出づるのみ。北米の南米に對して保護の政策に出づるは、其の同胞の愛の盛んなるが爲にあらず、北米は南米の一部が外國の羈絆をうくる時、その自國にとりて不利なるを思ひ、寧ろ之を扶けて其の獨立を維持せしめん事を利とするに過ぎず。即ち北米は、自衛上よりして南米を保護する

に過ぎず。同様の關係は、日本と支那との間にも存す。十五六年前に、支那分割の聲起り、今にも列強の割據を隣邦の上に見んとするの憂あるや、日本は、七十五年前に合衆國が亞米利加分割を恐れしと同様の恐れを懷き始めたり、然るに合衆國は、其のモンロー主義を以て列強を威脅し、幸に今日まで兵力を動かすの必要も起らざりしに反し、日本は、自己の利益を保護せんが爲め、前後二回まで干戈に訴ふるの必要を見たり、日露の役及び最近青島の戰これなり、日本は、領土擴張の爲めに、此の二回の戰を爲せしにあらず、全く自衛の必要上、己むを得ずして之に出でしのみ。米國の比利賓に於けるも

亦た然かり、即ち、日本が領土擴張の動機を以て青島を占領せしに非ざる如く、米國も、始めより比島占領の意志あるに非らずして、勢ひ之を占領するの己むなきに至りしものとす、(詳細は他所に記す)。

日本の南滿占領と、最近に於ける山東の一角の占領とを、同日に談ず可きにあらず、滿洲と山東との間には、共通の点少なし、滿洲は人口稀薄の地にして、之を支那領といふは、名のみ過ぎざりしなり、此地、初め露國に占領せられしを、後ち日本の取返へしたるは、猶ほ米國のカリフォルニヤを占領して、之を併合したるに類す、山東は之れとは其の趣きを異にす、如何なる國も、山東

を完全に占領し得べきにあらず、此處には餘まりに多くの支那人の居住せるを以てなり。されば日本の山東占領は、たゞ此處より歐人の勢力を一掃し得たりと云ふに過ぎず、而して之れ實に日本にとりては、死活に關する重大問題なりしなり、日本が初め露國の勢力を驅逐し、三國干涉後に於ける獨逸の勢力を驅逐したるは、日本の自衛上、實に己むを得ざりし所に屬す。

土地に渴せる歐洲諸國の存在するは、東洋の一勢力としての日本の存在にとりて、大なる目ざはりなりき、支那にして既に自己防衛の力をなき以上之を扶けて獨立を完うせしめんこと、日本を措いて他に適任者なし、

日本は假令へ支那に對する仁義上、これを行はざるまでも、自衛上然かせざるを得ざるの勢と、地位とに置かれ居たりしなり。

米國人にして、苟くも自國の歴史を懷ひ、其のモンロー主義を重視し來りし事を反省するものは、此の難局に處せし日本の立ち場を認め、歐洲人の及ばざる同情を日本に寄する事を得べきなり。米人は、兎に角其のモンロー主義を固執せしことが、自國の從來の成功の原因なりし事を確信するものなり、自他生々主義(“Live and let live”)を奉ずる米人は、自己の嘗て要求せし丈けの自由を、今の難局に處する日本に對しても、是認すべ

き筈なり。

然るに、米國には、日本を愛し日本に好意を有する多數の人あると共に、又た恐日病に罹る者も少なからず、此等の向きに對しては、日本の亞細亞モンロー主義に對する要求を是認するが、結局米國の利益なる事を、篤と心得しめざる可らず。蓋し聰明なる利己主義こそ、最上の國家的政策なるべきを以てなり、自己の相當と認むる所に従つて、自己の富を處分する商人は、其の委托されし財寶を極力保護せざるべからず、爲政者と政府とは國家を委托せられ、特に又た國民の子々孫々を委托せられしものなり、惡戰苦闘を爲しつゝある日本

を後援するは、米國にとり將來の不利益なりや否やは、米人の先づ考究せざる可らざる所に屬す。

此の問題は結局左の問題に歸攝し得べし、曰、支那は過去二十年來、諸國外交紛糾の因たりし所なり。將來の支那をして、引つゞき此情態を維持せしむるが米國の利益なりや、或は歐洲列強露、英、獨、佛の勢力を、支那の地より一掃するが、米國の利益なりや——これなり。

米人の利益は、日本にも支那にも、成るべく廣大なる市場を有せんことに在り。現在東洋に於いて、最大の貿易額に上れるは、綿加工品なり、之に次ぐは、マツチ、傘、卷烟草、ラムプ、油等なり、第三は機械工業品なり。即ち、

支那人の生活情態の向上と共に、漸次其の需要の増加を示し來るべきもの、謂なり、例へば裁縫機械、電氣裝置、科學用器具器械、寫眞機及び附屬品、家庭用具、鉛管裝置等、これなり、此外に、建築用鐵材、及び鐵道敷設用材料を加ふるも可なり。

此等三種の商品のうち、綿加工品、即ち綿糸及び木綿は、日本よりの輸入、最も長足の増加の勢力を呈しつゝ、あり、歐洲諸國は素より、米國と雖も、日本の工場と此の方面に於て競争せんことは、不可能なり、一日十五六錢の低きより働らく日本の工女、また長時間の勞働に堪ゆる日本の工女は、到底外人に其比を見る能はざる所

なりとす。然るに、日本は、一定の標準に達するまで、完全なる綿加工品を製作せんが爲には、米國産の綿花を輸入せざるを得ず、印度及び支那よりの綿花のみにては、支那人の需要を充たすべき、精製加工品を製作し得ざるなり、故に日本をして、支那の市場に勝利を得させんことは、畢竟日米兩國の共同利益たるなり。

第二種の貨物のうちにては、石油を除き、餘は悉く日本商人の手によりて賣捌かれんとする傾きあり。但し、日本は多少歐洲諸國との競争を繼續せざる可らざる場合もあるべし、石油のみは、米國が一手に引受くること從來の如くならん。

將來米國の産業上最も有望なるは、第三類の貨物なり。米國の各工場には、最高等級の職人あり、此等の工場の商品に於ては、日本も今後數年間は競争する能はざるべし。而して此等の生産品に對する支那人の需要は、今後増加の一方なり。但し、米國も此方面に於て競争者なきにあらず、獨、英、佛の如きこれなり、隨つて、此點に於て、米國は日本より脅迫せらるゝ事なし、反つて從來支那の大部分に對し勢力を張らんと試み、而して日本よりの反對に出會ひし如き諸列強こそ、今後の米國の競争者として、米國を脅迫するに至らんのみ。故に、米國は其の國家の利害よりいふも、又た其の商

業上よりいふも、歐洲列強を極東より驅逐せんは、即ち米國の利益なるべし、而して、斯く歐洲列強を驅逐するは、即ち日本の極東に於ける勢力の伸張を是認するわけに當るなり、將來日本が東洋の商業全部を獨占せんと試みざる限り、支那貿易の發達に關しては、日米間に利害の一致ありと認めざるを得ず。

日本とても、支那に對し商權を獨占せんとするものにあらず。これ所謂『機會均等』を破壊する所以にして、結局日本の不利益なるべし、何となれば、斯くせば米國と靈犀一點相通ずる能はざるのみならず、支那其もの發達を阻害すべく、而して其の阻害は、結局日本の不

利益となるべければなり。支那が發達して其購買力が増加せば、日本の商品も販路を擴張し得べし、而して此の購買力の發達如何は、外國の資本の支那に輸入せらるゝ程度如何によるものなるが、日本にして政治的に支那を占領せば格別、然らざる以上、この外資輸入は、日本一手にて引うくる能はず、主として他國の力に待たざるを得ざるべきのみ。

由來モンロー主義は、歐洲諸國の認容する能はざる所なりき、然るに、一九〇三年、大英國は自から所謂『腹藏なく』之れを認容せり。其動機の多少利己的なりしは、勿論なり。英は、獨逸が南米より大なる土地を割かん

とするを防止するを以て、年來の目的とせしを以てなり、然れども又一方に於ては、英は斯く自己防衛上より、右の認容を爲せしと同時に、從來英米兩國間に發達し來りし好感と直接なる利害關係とによりて、利益をうけつゝありし事も、亦た其のモンロー主義の認容に與かつて力ありしなり。

果して然らば、米國も亦た此の英國の先例に倣ふ能はざるか、米國にして、若し日本の亞細亞大陸に於けるモンロー主義を是認せんか、米國は日本より一層の好感と直接なる友誼とを贏ち得るのみならず、日本と共力して歐洲的勢力を杜絶し、依て以て支那の市場を米

國に向つて一層開放せしめ得るに至るべきのみ。即ち米國は日本のモンロー主義を認容する代價として、『門戸開放』を一層確乎たるものと爲し得べきなり。

米國にとりては、支那市場に於ける眞の敵手は、日本にあらずして歐洲なり、若し日米間の疎隔を計かり、其の提携を絶つが如き策を弄するものあらば即ち歐洲にとりては勿怪の伴なるべし、日本と提携せずして強いて之れを敵とし、見す々々折角の機會を逸するが如きは、米國にとり此上もなき愚なる政策なるべし。

夫れ、英米間に於ける寛容友誼の發生を、日米間のそれと比較せば、吾人の參考となる點少なからず。英國

は、元と米國の態度に對し十分なる理解を有せざりしものなり、然るに一方米國の側にては、機會もあらば自己の既に丁年期に達せる一強國たる事を證明せんと待ち構へしなり。然るに英國は、幸にも前記の事情より、米國の此の見解を是認したり、英米兩國間の關係が、以前と違ひ、比較的圓滿に行き始めしは、此の頃よりの事に屬す。斯くて米國が戦争の結果、植民的列強の班に加はりし時の如きも、英國は米國に反對せず、反つて之を助け、之に對する賞讃の辭を吝しまざりしなり。

蓋し英國は、米國が黒人に對する『白人の負擔』を果たすに於て、英國と心を一にし、主義を同うせることを、了

解せしによるなり。

英國の大臣等は由來手腕の缺げしを以て名ありしと雖も、彼等は常識に缺げしこと莫かりき、彼等は英米間に戦争を起す時は、經濟上の損失甚しく、少し位の領土や特權を増加するとも引き合はざる事を知り居たりしなり。されば、彼等は、幼稚なる米國の成長して自から此の事實を意識するに至るの日を、大人らしく待ち居たりしものなり。

建國後數十年間の米國は、初めて大人のズボンを着けし生長盛りの兒童の如きものにて、粗豪喧噪にして好戰的なりき、此の青二才時代を過ぎし後の米國は、天

晴れ丁年に達し、今や世界てふ商館に入らんとするに至れり。此時に當り英國は、巧妙なる外交術こそ心得ざれ、心切なる思やりを有する好老爺の如く、其子の昔の我儘をも恨みに思はず、親切に世話して、此の大商館に入らしめたり。米國が日本に對して如何なる處置を採るべきかは此の過去の教訓によりて、自から明らかなるべし。

英米間の確執のうち、到底仲保し難きものは、探險の權利に對する英國の意地張りなりき。斯る事は、今より考ふれば、何れにしても太差なき事なるも、當時に於ては、英國の威信に關する如く考へられしなり。之と

類似せるは今日日本が日本人をも歐米人同等に認めんことを主張するもの之なり、例へば學校問題に關する地方的法規の如き、又た土地所有問題に關する合衆國法令の如きに對する、日本人の不平の如し。而して日本人の此要求たるや、苟くも事情に精通し、多少此問題に容喙し得る丈の智識を有する人ならば、誰しも正當の要求と認めざるなき所なり。昔し英國が米國に前記の權利を許るさゞりし如く、今日の米人は、入學問題と土地問題とに關する日本人の要求を許るさゞらんとするなり。米國は果して、英國の聲みに倣つて、永久これを許るさざらんとするか。之れ果して米國

の利益なるか、又た日米兩國間の交誼にとりて、利益ありとするか。

日本は、目下その青二才時代を經過せんとしつゝあり、隨つて、今正に生意氣なるところも有らん、鼻の高きこともあらん、或は自尊に過ぎ、或は列強と認められんことをアせる點もあるべし。然れども、是皆な米國自から曩きに經驗せし事柄にあらずや。武士は相見互ひなり。互に他の短所を數ふるも、何の益あらんや。

英國が、米國の太平洋に出るを妨害せしは、元と英國自から之を欲求せしが爲めに非らず、元來米國の海外に向つて膨脹せしは、其の貧困の爲め、又は人口過剩の

爲めに非らず、國民勃興の氣運に驅られし爲めなり。而して英國が之に向つて妨害を加へし事は、米人の心に最も烈しき恨みを生じたり。日本今日の膨脹も、亦た一には此の勃興的氣運によるなり、獨り其經濟事情のみに因るには非らず。果して然らば、他國が日本に向つて此の實際妨害を加ふるに於ては、必ず嘗て米國の經驗せしと同様なる怨恨の、日本男兒の胸中に鬱勃し來るものあらんなり。知らず、米國は日本の永久の味方たらんとするか、將た其の忘れられざる怨敵たらんとするか。

前世紀の間に、米國は英國との間に、辛辣なる幾多の

爭端を有し、兩國間の感情兎角面白からざりしが、終に此の悪感情も一掃せられ、英國との友交の價值ある事を自覺するに至れり。今夫れ日米兩國間の關係に至つては之と同日の談にあらず。日米の間には未だ一回の戦争も行はれし事をなし。兩國の歴史は、最近に至るまでは、常に友愛の記録たりしなり。

シェーアード以來ルーズベルトに至るまでの多數の爲政者等は、太平洋を以て、近き將來に於ける世界的最大事變の舞臺と見做し來れり。思ふに、過去に於ける國際的活動は、主として戦争に限られし事をれば、斯く太平洋を以て大衝突の舞臺と見做せしも、亦た強が

ち無理ならぬ考なり。

然れども、商人は和樂共同の方が命がけの競争よりも有利なることを知れり。爲政者また、經驗によりて同じく之を悟らざるの理あらんや。今夫れ太平洋に於て、利害關係の最も密接なるは、太平洋の波の打ち寄する日、米、支三國なり。此の三國の利害は、互に相異なるも、亦互に相交錯せり。随つて、三國互に相調和せんか、其の互に孤立の策を講じ、又た相衝突せんことを計畫するに比して、利益多きや知るべきのみ。

米國は、支那に於ける「門戶開放」を欲し、日本は、東洋にも米國の如きモンロー主義を實行せんことを欲す。

故に、米國にして若し日本の主張を認め、日本にして若し米國の主張を認めんか、歐洲諸國も手の出しやうはなく、太平洋の平和は、爲めに確保せらるべし。

簡言すれば、米國は未來永劫ノックスの首唱せし如き排日的計畫を棄てざる可からず。否を獨り、之のみならず、多數の米人の今日主張する如き、無干渉主義を改ためざる可らず。即ち消極政策を棄て、積極の政策に入り、進んで日本と握手し、同盟し、假令へ攻守同盟は結ばざるまでも、日本の膨脹と強大とに向つて進むことに、助力せざる可らず。

日本の生産品の最大なる輸出先きは、東洋に於ては

支那を措て他にある事なし。故に支那の保全と繁榮とは、畢竟日本の利益なり、支那の屈辱し、萎微し、貧窮するは、即ち日本自からの不利益なり。此點に於て、米國の支那に於ける放資と、支那人の生活向上に向つての努力とは、日本に於ても強がち嫉視すべきものに非らず、巧妙なる外交家は、即ち之を善用して、日本の顧客たる支那の開発向上を助け、以て其の日本に向つて利益の反映し來ることを計るべきなり。

日本の東洋に於ける生産品の大市場は、支那なるが、其の生産の原料供給所として、將來最も有望なるは南洋なり。日本が、南洋と支那とを東洋經略の策源地と

して、自家モンロー主義の範圍内に描かんことは、日本にとりて、唯一の經濟的活路たる而已ならず、又た米國にとりても最鞏固なる商權の保護たるべきなり。況んや米國の、漸く太西洋方面に多事ならんとするに當りては、其の太平洋方面の靜謐と利權とに對し、日本に負ふ所、日に多からんとするをや。

南方帝國論終

2366

OUR LAND OF PROMISE IN THE SOUTH

I. THE HEROIC AGE OF JAPAN

A heroic age spells a hero-less age. Paradoxical though this may seem, it is none the less true. In such an age, each man born of woman is a hero and any incident proves epoch-making. The time of Napoleon in Revolutionary France, the reign of Frederick the Great in expanding Germany, and the Elizabethan period in England—these may justly be called heroic ages, the modern period in Japan since she adopted the name of "Dai Nippon" is among the number.

There is a tide in the lives of men,

Taken at the flood, leads on to fortune.

This passage is attributed to Shakespeare, and is as applicable to phylogenetic cases as to ontogenetic. Let us see if it is true of modern Japan.

Decades ago, Japan was only a geographical conception. A few foreigners who noticed that name on the map, either regarded it as that of a vassal kingdom of China, or a mere geographical existence, its political significance being next to none. This small Island-Empire, however, began to assert itself by leaps and bounds. The Franco-Japanese Agreement allotted Annam and Tongking to France, and the Russo-Japanese Alliance enabled our Allies to focuss their main force upon their common enemy. In this way Japan has come to be master of the situation and is now in fact, so to speak, a great shareholder in the peace of the world.

The military existence of Japan was formerly ridiculed. Foreigners smiled at the idea of Japanese militancy. You may imagine how surprised they were when Japan came off victorious both in the Chino- and Russo-Japanese wars, depriving these two Powers of their whole navy. But it was during the Boxer's Troubles that Japan proved her superiority in the "men behind the gun."

Thus she has shown herself in a few years' time worthy of the name of a first-rate power both in the naval and military sense of the word.

As Island-Empire whose yearly gross increase of the population of 682,000 creates a problem difficult of solution, and whose arable land is rather small, and whose imaginable development of industrialism can not possibly provide work indefinitely for so many hands,—for such an Empire, as we really are, there is no other relief than migration—the only means to give proper vent to the internal pressure of population seeking an outlet on any possible opportunity. Expansion or extinction—this was and still is our dilemma. Japan in the rising generation has never been fortunate enough to secure what is to be called a colony until Formosa and Korea fell into her hands in consequence of the two warfares. We have succeeded in our South Manchurian Railway business profiting by the experience of the East India Company. The oldest form of colonial policy has thus been

realized to our credit in South Manchuria, whilst on the other hand the newest form has been tried in Korea, and has so far proved a success. Japan has thus come to be regarded as a colonial empire.

As regards economical development we have been far behind most European nations. But our recent increase in exportation and advancement of industry together with our monetary status apparently show that we have already passed those economical stages when the importation of foreign capital was needful, and when we limited ourselves to exportation of raw materials or our manufactured goods. We are now seeking an outlet for our accumulated capital in foreign markets. Japan begins to assert herself as an economical Power.

Japan is now more than a mere geographical existence. She has already been recognized as a Political Power, then Military and Economical, and now promises to be an Economic Power. Japan has entered upon a period of World policy and World economics.

World policy came into being in the case of England after the American war of Independence, and it happened in the case of America in the eighteenth and nineteenth centuries; so it does in the twentieth century in the case of Japan. Japan is now in her prime, or in her heroic age.

Since the outbreak of the present war, Japan has begun to control the situation surer than ever. But it has cost her the two previous wars and present one, which have compelled her to build up an expensive military equipment that is breaking her financially. She is facing her dilemma. She can not retrogress to her former stage of economical development, while it is next to an impossibility for her to hold on to her present economic stage, and maintain her armed preparedness both at the same time. She must either be a military conqueror and a bankrupt, or an economic conqueror and a solvent Japan. Which will more profit the other Powers' selfish interest, a solvent or a bankrupt Japan? So far as they check her

natural expansion, she is a hopeless case. If they, on the contrary, help her to become prosperous enough to get over her dilemma, they will find her interests consonant with those of themselves.

2. LOOK TO THE SOUTH!

It is not our desire for territorial aggrandizement, but our natural and normal impulse that makes us seek for an outlet. Japan's expansion does not mean "Yellow Peril," but a benefit to the other Powers. Suppose Russia or Germany had come instead of Japan to control the situation in the Far East. Is it conducive to the Balance of Power? So long as Japan continues to be a guardian God, peace shall ever reign the Pacific. An impoverished and humiliated Japan must mean a loss to European Powers, especially to America, whereas a prosperous and high spirited Japan their own national success. Let Japan enjoy peacefully her opportunity in her neighbourhood without entailing any risk of warfare. "Let and let live." "The

green grocer can not buy of the baker unless he himself sells his own wares." Antagonize Japan, and you may waste your opportunity. Divide the field with her, and you may thrive altogether. Business men have learned that co-operation brings more success than cut-throat competition. If the principle of "Open Door" be established for Japan, a *quid proquo* in exchange for such acknowledgment is sure to be gained.

Trade does not follow the flag, but follows the least resistance. Where is to be found this least resistance? The Pacific is bordered by the territories of the United States down to the thirty second parallel. Then comes Mexico, Central and South America, next Australia, the Dutch-Indies, and the Philippines, then China Proper, lastly Manchuria, Korea, and Siberia. Siberia and Manchuria are out of the question, for the Japanese do not live on anything but rice, and they can not find a good rice-crop there. In Korea, sooner or later, the pressure of population will be felt. China Proper is over-

populated already. South America is roomy enough, but the connection is rather tenuous for Oriental colonists there. What is worse, some part of it—such as the Argentine Republic has a strong antipathy towards coloured races, believing that they are the decendants of the white. Australia is also out of the question, for they prohibit the incoming of Oriental labourers since 1904. Mexico is in peculiar political conditions which have a baneful influence upon such emigration. There are left the Dutch Indies and the Philippines. These are the natural outlets of Japan. Though the way is not yet been cleared for extensive emigration, the connection is not tenuous there, and there are paddy lands suitable for rice cultivation. More than this, the Japanese are strong believers in the tradition that their migrating ancestors came from these Southern Archipelagoes. These are our "Land of Promise." Our recollections, our longings, and our yearnings are all focussed there. Our "Canaan is in the South."

3. AMERICA AND THE WAR

French crying for "Liberty, Equality, and Fraternity," Americans uprising for independence, and Japanese striving to get rid of feudalism—all these were the actors of the world drama showing the modern states striving toward the common end—Democracy. There has appered, however, a state flatly refusing to join this common cause. That is Germany. The Kaiser represents the anachronism dreaming military conquest of the world, while Wilson represents that of the current ideal of democracy. The World War is not the war, as many presumed at the outset, between England and Germany, but that between the two great under-currents of thoughts: Militarism and Democracy. You may ask: "Are not all the belligerent nations militarists?" "Yes." I would answer, "for the moment only." Even the church is militant when it has to deal with the forces of evil. We do not fight for fighting's sake. For the Entente Powers

militarism is the means, but not the end, as it is for Germany. It is true that the war has overturned an ideal, economic and politic, which has so long been cherished by the modern democratic states. But it should be regarded as a temporary phenomenon. The normal trend of World economy will in time be restored.

“Melting-pot” as she is, America is now making of her heterogeneous elements the greatest symphony ever heard, with Wilson as their conductor. In February, 1917, she openly took up her stand against the Central Powers. This final resolution of America may economically prove in a long run so disastrous for her that no possible gain in territory or in prestige could compensate for it. But she fears nothing. She sacrifices everything. She endures meat-less, fish-less, or what not-less days. The people, old and young, men and women, have united in a common understanding. Such a harmony,—a harmony among discords, is peerless in world history.

But America still needs to adjust herself

to a new order of concordance. I mean a greater harmony among those nations whose shores are washed by the waters of the Pacific. The interests of America, Japan, and China are diverse, and at the same time so much interrelated, that if the three nations can work in harmony, there will certainly be realized the greatest symphony. Not soon after the war, but later than that, the world may be settling down into a confederation of large and small states peopled by white, brown and yellow peoples, whose liberty and happiness does not depend on the paleness of their skins, but on their degree of education and industry. As a first step toward such a consummation, an international conference on pacific problems might be called to abandon, once and for all, the antipathy and affronts shown by all parties concerned. What Japan wishes is an equivalent of the Monroe Doctrine for the East. What China seeks is a *quid pro quo* of the “Equal Opportunity.” And the desideratum of America is the “Open Door” in China. If China supports

Japan's claim, and Japan China's, China America's and America Japan's, Europe will be forced to acquiesce, and there will be a Pacific Empire in all but the name.

If some discord prevails, if antipathy continues, Japan might easily conquer China and seize all the American colonies in the East. She might of course reap some very great economic advantage to compensate for the great expense. But China has a far more effective weapon than that of Japan. This is the boycott. And America has it too. Though there may be some counteracting measures to be adopted by Japan, lossess which such a contingency may entail would be far greater than any probable gains. He would be a mad man who settles the matter by dint of force. But if the occasion demands, the most sensible nations might be mad enough in order to save their face. During the century, America has had many acrimonious disputes with England, and England's attempts to limit American expansion to the Pacific raised the fiercest resentment. Japan

might well resent too any attempts of foreign nations to curve her expansion. We acknowledge the criticism that we are "cocky," bumptious, and self-conscious. But all these phenomena have been displayed by America in her own hobbledehoy period. America has passed through that period, and Japan is now passing through it in her turn. If there is any one who can keenly appreciate Japan's position in her difficulty, it is the Americans. They once wished us well and helped us into the World Policy period. If they should turn a cold shoulder toward us, European powers would come upon the scene and an unexpected situation would be witnessed in the Far East. Is it a wise policy for America to muddy the water for years to come? It will do well for her to consolidate under her leadership all the Oriental Powers uprising in common cause with her. Americans, be ambitious and magnanimous! That is the only way you can live and let us live.

4. MONROE DOCTRINE IN THE EAST

Washington in his "Farewell Address" warned Americans to beware of "entangling alliances." But it has become quite doubtful whether they can continue this policy much longer, since their national interests are now longer confined to the New World and their former isolation is now gone. On the other hand, the American people and their leaders have cherished one dogma with a reverence that has been at times the source of much irritation to Europe. This is the famous Monroe Doctrine. The doctrine was based upon the instinct of self preservation. For the "Holy Alliance" of Russia, Prussia, Austria, France, and Spain was organized in order that they might root out the growth of democratic ideas. This was a reaction which set in in Europe after Napoleon had been defeated at Waterloo. Great Britain did not join the alliance. But she laid claim to the North-west of the North American continent.

More than this, the people of the United States had been in conflict with that nation so recently that they feared her most of all. The English had ever been wholly unable to comprehend the American attitude in a matter in which rationally they might be expected to have scant interest. Had it not been for England conceding finally the American demonstration of their coming of age (In 1903 Great Britain accepted the Monroe Doctrine "unreservedly.") Anglo-American relations would have been very different. God knows whether the British concession was made in an altruistic spirit or not. But at any rate, if there hadn't been mutual jealousies of the challenging powers, notably Germany and England, and had they not acted as a restraint upon one another, England would never have accepted the Monroe Doctrine, and the United States might have been portioned out among the Powers of Europe as Africa has already been. Great Britain has greatly profited by the cordial relations that have since developed between herself and America. An analogy

to this might be found between America and Japan. America has much to gain by retaining Japan's personal friendship, she has everything to lose by loosing it. For it is to America's advantage to keep Europe out of East Asia, which involves the acceptance of Japanese dominancé in Far Eastern affairs. Nothing could suit Europe's purpose better than to divert American sentiment from this essential point by stimulating antagonistic feeling between the Americans and Japanese.

5. THE PHILIPPINE PROBLEMS

Previous to 1898, the name of the philippines was a nonsense to nearly all Americans. They had hardly heard of the existence of the islands or of the Spanish colonies in the pacific. In consequence of the war between Spain and America, Manila and its environs were captured by the latter. Till some time after, thousands of Moros, Igorottes, and other races who lived in the other islands were quite ignorant of the war and unconscious of their having been "sold."

"The philippines protested violently against being sold or traded like a chattel, and it can not be gainsaid that the transfer for a monetary consideration of an alien land and its inhabitants from any country to the United States, would have worried the signers of the Declaration of the Independence or the American statesmen of the ,60's. It is hard to say how sincere the Filipino agitators were. It is much more certain that the American occupation deprived them of their chance to shine as saviors of their country from the yoke of Spain." (From "Japanese Expansion and American Policies" by James Francis Abbott). Thus it was that altruism has become American colonial policy in the Philippines. The Governor-General, Forbes, said at the time of his inauguration :—

"Analysing the instructions of President McKinley, we may fairly take as the goal to which we are to steer, the happiness, peace, and prosperity of the Philippine people. In so far as the people are to-day happy, peaceful and prosperous, we have succeeded; in so far

as the people do not enjoy these blessings, we have not yet achieved success.”

The phrase “Immediate Independence,” inscribed upon the banner of the majority, is neither a new inscription nor a new ideal. Indeed the record thereof begins with the passage through the assembly of the resolution in May, 1910 :—

“Whereas the Philippine Assembly, as the legitimate representatives of the Filipino people, must be the faithful echo of what the latter thinks and feels :

“Whereas the Philippine nation, being positively convinced that it possesses the actual capacity for self-government as a civilized nation, aspires ardently to be independent, and, trusting in the Justice and in the tradition of the nation that now directs the fate and destiny of the Filipinos, anxiously hopes to obtain it as soon as practicable—immediately, if that be possible—from the Congress of the U.S.A.....”

Having become independently so lately, Americans can not but look with Friendly

Sympathy upon these islanders yearning for their own government founded on democratic principles. Thus from the standpoint of ideals, the Americans are historical friends of Filipinos. The enunciation of the “Immediate Independence” is, in fact, the expression of the instinct of self-preservation, than which, we are taught, there is no higher law.

Official Washington is justly expected to take the earliest occasion to grant Filipinos their desideratum. From the standpoint of economy, American Altruism in the form of the philippine enterprise coats more money than she can spend for a mere luxury. It is true the American is not given to counting pennies, but her expense of more than a billion dollars in the Islands since her occupancy has repeatedly been stated in congress to the amazement of the audience. Filipinos should be sensitive to what they owe to America, and to pay their debt after becoming independent of their foster mother. But they must not be in such a hurry about it, for there is much to be learnt by them

before they can be independent. Above all, they must first show themselves equal to self government. They are now on probation, for they have not come of age yet. It is an urgent necessity for them to be taught in modern sciences and in fundamental principles of democratic government. Governor Forbes's plan is to invest money in education there so that he can put into the schools the one million and a half children who cannot now have this privilege owing to lack of funds. There is no better investment than enlightenment, but there remains a problem: "In what degree of enlightenment are Filipinos to be regarded by Americans to be worthy of independence?" Mr. Frederick Chamberlin says in the conclusion of his recent work "The philippine problem" (Published April, 1913, by Little Brown & Co.).

"It seems folly to believe that these extremely bright, intelligent, ambitious, proud *gente illustrada* are going to sit by tamely until we tell them that we think they can run their government. Certainly the *gente illustrada* will never agree with us as to just when they arrive at the state of development we demand of them. Indeed, they are

quite sure that they have reached it already. In that they doubtless disagree with us at this moment by some centuries; for if it be true that we are not going to set these people free until they can run, or we think they can and will run, a pure democracy like our own, that time never will arrive, for the Oriental will never want a pure democracy, as it is contrary to his idea of what a government should be—and he will have his way as soon as he can procure it.

But if we are to persist in this hopeless task of making a Caucasian mind in an Oriental skull, the day will eventually come when we shall have educated so many Filipinos that they will probably rebel at some of our injustices. If they do not revolt under such provocation, for example, as our delay in giving them the 1909 tariff laws, certainly our efforts to educate them with American ideals will have accomplished little. If they rebel, we shall of course, reconquer them, and then very likely take their uprising as another evidence of their inability to set up a stable government, with the result that we shall have a fresh reason why independence be withheld from them for another century or so.

If we remain, we shall have to continue indefinitely our expenditure of some millions with each new year.

Then, too, we shall govern the Islands often badly, at times very badly, because the Congress at Washington will not pass legislation that will benefit or even save the Filipinos, if such action injure American interests and particularly powerful American industries. Whenever the two countries clash, it will be the Filipinos who will suffer.

They are so far away that we shall not hear their cries of distress often enough to be kept aroused until we can answer their great need. It took about ten years to get the Congress to grant free trade between the United States and the Islands. Although the latter were prostrate industrially because of the lack of this very legislation. The American sugar and tobacco interests, in the main, were able to postpone for this long period of time the only laws that would afford relief.

There will always be similar neglect so long as the Islands be dependent upon the American Congress, not because that body is any more selfish or neglectful than any other corresponding body of a great nation—but because the American Congress will be and has been just like all other Congresses in history in their handling of similar situations. The story of the treatment by the British Parliament of England's colonies in this country and of Ireland is the only precedent that need be cited.

Mr. Chamberlin says somewhere else :—
“He would be extremely bold who could feel sure which in the end will be the best course, either for the Philipines or for the United States. Sceptical as they are, his remarks may perchance represent the general trend of American public opinion. Suppose Filipinos will attain in a century or so to the stage of American civilization to-day, Uncle

Sam may not grant them what they cry for. For he measures the other by his own standard, whilst his own level rises higher and higher year after year. Filipinos can not rely upon such an arbitrary decision. They must be regenerated, strengthened, and elevated by their own culture. But is there anything in the world to be called Philippine culture? No one dare say “yes.”

Nothing short of the self-made culture of one's own country can rally one's own countrymen in common cause. As the Filipinos are Easterners after all, their culture should be modelled on an Eastern type of civilization. No people on earth resemble them more than the Japanese in their physiognomy and temperament. The explanation of this fact is the lineal proximity between the ancestors of the two peoples. Taking into consideration all these points, I presume that they have much to learn from our experience in building up our culture and in keeping out of foreign interference at the time of our restoration.

Apart from such an idealistic point of view, Filipinos must be regenerated on the material side also. I mean their industrial regeneration. As aristocratic England was democratized by her industrial revolution, so the Filipinos are expected, by their own, to get democratic training, which is a fundamental requisite for their self-government and independence. For this purpose they are in urgent need of importing foreign capital. The *gente ilustrada* are said to be opposed to that policy. But the capital of those foreigners who always wish them well may as safely be imported as their culture. Blessed be one who shares their joys and sorrows, their hopes and fears, and all their days to come!

南方帝國論
松本敬之
著
稲村峯一
發行
新井由藏
印刷

大正七年五月十九日印刷
大正七年六月十四日發行

南方帝國論與付
定價金七拾錢

著者 松本敬之

發行所 稲村峯一

印刷者 新井由藏

東京市京橋區木挽町二丁目十三番地

不許複製

發行所 東京府北豐島郡 巢鴨町一六九三 縱橫社

362

67

終

